輿石先生さようなら

輿石哲哉先生（スコットランドにて）

輿石さん、どこへ行ってもお達者で！

村上　まどか

振り返れば30年近く前、４年生に太川陽介に似たカッコイイ先輩がいるという噂の主は、輿石哲哉さんでした。東京外語大英米語学科時代のことであり、ちなみに輿石さんと私の間の学年には、当時から交際していた現在の奥様がおられました。

たまさか同じ英語学を志すようになり、大学院生時代はよく一緒に飲み食べ歌いに行きました。輿石さんは院生控室のドアを開けながら「ねぇ、*Open me the door. って言えると思う？」とたずね、私は「さぁ、どうでしょうね」（今なら自信を持って却下できるのですが）と答えるような、他愛ない英語学ネタを共有しあう日々でした。形態論研究の輿石さんが選んだ修士論文のテーマは –’s 属格であり、「The King of England’s daughterも言えるし、The girl who lives nextdoor’s boyfriendも言えるんだよ」と、これまた院生控室で初めて聞いて、ホントですか～と驚いた記憶があります。

当時はワープロが出回り始めた頃でもあり、でも履歴書は手書きがよいという意見の中でワープロ派の輿石さんは、「字がうまいのに、履歴書をワープロで書いたら自分に不利ですよ」と言われていました。実際にどちらで書いたのかは知る由もありませんが、最初の就職は故郷・山梨県の短大になさいました。

輿石さんが本学に着任したのが1994年 ― そして今、このように英文学科の同僚として輿石さんと再びお近づきになり、しかも院生時代より長い７年間をご一緒に過ごしたとは、縁とは不思議なものです。英語学担当教員はこの２人しかいなかったので、車の両輪のようにうまく回っていたか

は分かりませんが、科目や卒論指導、査読や書類作成など、分担しあい助け合いながら、お陰様でここまでやってこられました。「卒論は、単語とそれより小さいレベルがテーマの学生が僕の担当で、単語より大きいレベルがテーマの学生は、まどかさんね」と言われ、それは分け方としては一理あり、お互いの専門分野にも大体合うのでうっかりうなずいたら、私の方の学生数がはるかに多くなって閉口し、次の年からそのやり方はやめてもらったことも、今となっては笑い話です。

最近の輿石さんは、2000年にエディンバラに留学したのを機に、元の名詞とは似ても似つかないラテン系形容詞（例: springの形容詞はvernal）の研究を深め、在外研究終了後も職務の合間を縫ってエディンバラに通い詰め、ついに博士号を修得、さらには昨年Peter Lang 社から*Collateral Adjectives and Related Issues* という著書を出版したのが素晴らしい快挙でした。この業績を引っ提げて法政大学に移られるとは、ますますめでたいことであり、残される私達はさびしくもなりますが、ここは笑顔でお見送りいたしましょう。

さよなら、さよなら！
　いろいろお世話になりました
　いろいろお世話になりましたねえ
　いろいろお世話になりました　（以下略）　　中原中也

1999年イギリス・ダーラムのパブにて、輿石さんと筆者

輿石先生との思い出

関　めぐみ

輿石先生がこのたびご退職されるということで、輿石ゼミ卒業生である私が、先生との今までの思い出を振り返りながらお言葉を述べさせていただきたいと思います。

私と輿石先生の出会いは、今から5年前になります。私の入学式がその時でした。1年生の時は残念ながら必修科目等で輿石先生にご指導していただくことはありませんでした。しかし、一度だけ「基礎セミナー」の授業で輿石先生がいらっしゃった時がありました。その時輿石先生が「僕と廊下ですれ違ったら、Tetsuと呼んでね」とおっしゃっていたのを覚えています。私はその言葉を聞いた時、学生ながら何て社交的な先生なのだろうと感じました。これが私の輿石先生に対する第一印象でした。

2年生の時は、必修科目の「英語学概論」の授業でお世話になりました。先生は授業中とても多くの知識を私たち学生にお話しして下さいました。輿石先生は1つの話題から10も20も知識が出てくるのです。輿石先生も授業時におっしゃっていましたが、先生の知識は英語学だけに留まらず幅広く多岐に渡っているのです。そのため、授業時に輿石先生から英語学以外のものもたくさん学ぶことができました。今振り返ると、とても貴重な時間を過ごさせていただいたと思います。

3年生の時は、輿石先生の授業を履修することはありませんでしたが、4年生になってから輿石ゼミへ所属することになりました。輿石ゼミへ所属する際に、私は「英語教育」について研究しようと思っていました。しかし、輿石先生の専門分野には該当しておらず、不安になり直接先生へご相談さ

せていただきました。その時先生は「どんなことでも自分の好きなことを研究しなさい」と答えて下さいました。その時とても安心したことを覚えています。

いざ4年生になり「セミナー」の授業が始まると、2年生時に受けた「英語学概論」でも聞けなかった輿石先生の細かな知識をたくさん聞くことができました。輿石ゼミは毎回全員で集まり、自分の論文の枠組みをプレゼンするという形で進めていきました。ゼミ生全員の研究内容を生で聞くことができたので、自分の研究分野以外にも知識を得ることができました。輿石先生の狙いもそこにあったように思います。プレゼンが終了するたびに、輿石先生は1人ずつ丁寧に「この本を読んでみなさい、こういう見方をするとどうなるか」といったようにアドバイスして下さいました。私の論文でも「教育実習の実体験を踏まえて英語教育を研究してみたらどうだ、この国の英語教育はどういった時代背景があったのかを調べてみよう」といったようなアドバイスをいただき、論文を書く上でとても大きなヒントになりました。

さらに論文添削では、輿石先生に途中経過をメールで添付すると、右半分にコメントとして非常に細かい添削が書かれて戻ってきました。例えば、「この部分はこの本を読んで詳しく説明した方が良い」、「ここは著者がこのように述べているので、これを言及した方が良い」などといったことです。夕方に添削をお願いしても、輿石先生は翌日の早朝には必ず返信して下さいました。輿石先生に添削していただいたことは、どれも自分にとって大変役に立ち新しい発見にもつながったので、自分の財産になったと思います。

ゼミ合宿の時も忘れられない思い出がありました。それはお昼ご飯に先生お勧めの釜飯屋さんへ連れて行って下さったことです。釜飯屋さんへ行った日はちょうど箱根に台風が直撃しており、みんなずぶ濡れになりながら裸足に下駄というおもしろい格好で出かけたことをよく覚えています。また、その釜飯屋さんでは日本へ新婚旅行にいらしていた外国のご夫婦と出会いました。日本語があまり読めないご夫婦に、輿石先生はとっさ

に英語で優しく説明していらっしゃったことが大変印象的でした。最後にご夫婦と私たちで写真を撮ったことも、素敵な思い出になりました。

私が助手になってからも、輿石先生にはお世話になることばかりでした。助手になりたてで仕事で失敗することを恐れていた私に、輿石先生は「失敗なんてみんなすることだから心配しなくてよい」と言って下さったことにどれだけ助けられたことか分かりません。輿石先生が助手室へいらっしゃると、助手室の雰囲気が一気に明るくなるような気がしました。

このようにたくさんの思い出のある輿石先生が、3月でこの学校を去られると思うと、大変寂しくなってしまいますが、輿石先生のますますのご活躍とご健闘を心よりお祈りし、私からの言葉とさせていただきます。

今までありがとうございました。

輿石先生

お世話になり、ありがとうございました。

We will miss you.

英文学科一同